
お宅訪問の765プロ

柳雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お宅訪問の765プロ

【Nコード】

N5204V

【作者名】

柳雨

【あらすじ】

茹だる夏の暑さでダウン気味な765プロ所属のアイドル達とそのプロデューサーが本日はなんと、同僚のお嬢様アイドル・水瀬伊織のお宅を訪問しに行きます！

（前書き）

本作は『THE iDOLM@STER』の水瀬伊織メインの二次短編です

尚、プロデューサーが変な奴だったり、アイドル達がアイマス2仕様だったり、設定がアニメ版に近いものだったり、とにかく目茶苦茶なことが起きるので苦手な方は閲覧の際には要注意してください（汗）

・ヴォーカル・ダンス・ビジュアルアピール…ありとあらゆる分野で大活躍している765プロ所属の人気アイドル達、果たして今日はそんな彼女達に何が待ち受けているのだろうか…？

・水瀬家。

「Welcome! にひひッ♪ようこそ、我が家へ♪」

・豪邸をバックに立つ、おでこを半分出した髪型、腕にウサギのぬいぐるみを抱えたお嬢様風の少女…小悪魔系アイドル・水瀬伊織は可愛らしく笑いながら来客達を迎えた。

「うっうっ♪お邪魔します!!」

「「うわーい!! おりんの家でつかうい!!」」

・柔らかな質のオレンジがかった茶髪をツインテールにした幼い印象を持つ少女…庶民派アイドル・高槻やよい、顔がそっくりな最近中学生になったばかりの双子の最年少アイドル…髪を右に結んだ方が双海亜美、左側に結んでサイドポニーにした方が双海真美、三人はとにかくデカイ伊織の家を見てテンション上がりまくっていた…だが、それとは対照的に…。

「あふう…むにゃむにゃ…おやすみなのだ…」

「おやすみ…ぐが…。」

「コラア！？何そんな所で寝てんのよ！そのバカ二人ッ！！」

・派手な金髪の少女…スーパーアイドル・星井美希とスーツ姿で一応人間なのだが頭が何故か黄色い巨大なアルファベットの『P』になつて怪しい人物…765プロのアイドル達の専属プロデューサー（通称：P）はダラ〜ンとやる気なさそうに地面に寝転んだため、伊織に怒られた。

「冗談だよ。」

「なの！」

「オイ。」

・どうやら二人なりの場を和ませる冗談（？）らしいが伊織の視線と反応には冷たいものを感じられる。

「まあいいわ、そんなことよりも入って入って♪」

「『『『『『お邪魔します！！（なの）』『』『』『』」

・伊織は気を取り直してP達を自宅へと招き入れ、彼女の案内に従い一同は挨拶しながら水瀬邸へと足を踏み入れる…。

・さて、何故彼らが伊織の家に来たかというと、来週は都内の市民会館にて伊織・やよい・亜美・真美・美希の五人がイベントとして

ライブ&トークショーを行うことになっており、その打ち合わせをすることになっていた。

・だが、今は猛暑続きの夏！外の日光だけでも地獄の暑さだというのに765プロ事務所のエアコンが故障してしまい、室内にこもる異常な暑さのせいで大事な打ち合わせ（ミーティング）もままならず、全員のモチベーションが下がった時に救いの神・伊織大明神の『仕方ないわね』の一言で冷暖房常時完備な水瀬邸へ全員お招きしていただけたというワケである。

・水瀬邸の中は玄関先でさえ凄かった、床には赤い絨毯、天井にはシャンデリア、通路にはPの給料では絶対買えなさそうな絵画や壺といった調度品で飾られている。

（さあ、この伊織ちゃんの家に行って来たみんなはどんな反応するのかしらね？にひひっ）

「「「おお！？涼っしい！！」「」「」

「…って！真っ先に出た感想がそれーッ！？」

・伊織は心の中でみんなの反応を期待しながら楽しんだが、家の中の感想よりも天国の様な室内の涼しさに感激する庶民的なP・美希・亜美・真美に思わずコケた。

「あ、見てください！天井からお空が見えますっ！うっうー！綺麗ですっ」

「やよい〜！アンタ、マジいい子だわ！！」

- 涼んでる四人とは別にやよいは水瀬邸の天井を見つめて年相応にはしゃぎながら純粹に素直な気持ちで家の感想を述べたのを見て伊織は親指でサムズアップしながら喜んだ。

「この吹き抜け、イイでしょ！どう？この開放感、そして天窓から差し込む日光は？」

「ほう…クソ暑かった外では忌ま忌ましい太陽の光も涼しい室内だと打って変わって暖かに感じるな。」

「「うわー！スッゴイ」お空もキレー！！」

- 伊織に言われて天窓が張られた吹き抜けの天井に気づき、外ではイライラと憎しみの対象でしか無かった日光も冷房が効いた水瀬邸の中では暖かな光に変わり、さらには空の青さも相まって素晴らしい風景となってるためこれにはP達も思わず感動を覚えた。

「あふう…お日様がポカポカ…気持ちいいの…ふあ…ああああ…むにやむにや…」

「ちょっと美希！？なんで立ったまま器用に寝ないでちょうだい！！

- しかし、睡魔とお友達な美希には立ち寝する程心地好過ぎたようだ。

「こっちは庭か…。」

- Pが何気なく外側の通路の窓を見ると広々とした芝生が広がり、手入れもしっかり施された庭が目映った。

「ふふん♪庭の草だけじゃなく土もコダワってんのよ？最近じゃ家庭菜園って奴を始めてみようかなって思って、専用ビニールハウスまで建てたんだから♪」

「うおッ！？こりゃあ本格的だな！」

・さすがはお嬢様、住んでる家はおるか家庭菜園のスケールさえも違い過ぎる…Pはつくづく水瀬家の財力に驚かされた。

「うっうー！家庭菜園ですかー！？」

「にひひっ♪トマトやハーブ、イロイロなもの育てるのよ♪」

「へへ、なんだかめっちゃ楽しそーだね、亜美♪」

「今度ウチでもやってみよつか？真美？」

「あふう…美希、あんまりお野菜好きじゃないの…。」

・家庭菜園自体が珍しいのか、やよい・亜美・真美は興味津々だが、美希だけはマイペースさがぶれていない。

「さあッ！次は2階よ！」

・伊織の案内にて、次は2階へ移動する一同。

「ゆったりした階段で上りやすいの〜。」

「「「うわーい♪快適だ〜」」」

「「うつうつー！楽々ですー！！」」

「その通り♪これもコダワリで、階段一段一段に余裕を持たせてあるのよ♪」

「手摺りさえも立派な造りだな…映画に出てくる豪邸の階段ってこんな感じだぜ。」

・ゆったり緩やかな造りの階段に見事な彫刻が掘られた手摺り、これには上る時もそうだが下る時もさぞかし気分が良くなるだろう。

「さあ…本邦初公開♪ここが伊織ちゃんのお部屋よ♪」

「「「「ここも広ーい（なの）！！」」「「「「

・伊織の自室はベッドや部屋の造りが広く、豪華なことを除けば、彼女の好きなウサギのぬいぐるみなど可愛らしいものを飾ってあったりと、まさに年頃の女の子の部屋そのものであった。

「さ、ミーティング始めるわよ！！」

「「「「「おー（なの）！！」」「「「「

・それぞれ自由に座り込むと、部屋の外からノック音が…。

「失礼致します、お嬢様…お客様方にお茶をお持ち致しました。」

「御苦労、新堂。」

（マジものの執事さん！？）

（（ウヒャー！やっぱお嬢様には執事さんが付き物なんだね♪））

（（ひつじさん？））

・水瀬家の執事・新堂が紅茶やお茶菓子などを運んできたので、伊織は軽く労いの言葉をかけて彼を引き下がらせる…そのやり取りを見たを見て、Pと亜美・真美は初めて見た執事にちよつと感激したようだが、やよいと美希は何か別なものを頭に浮かべた。

「いや」… 実に大したモンだ！何もかもハンパないな。」

・ミーティングの最中、ふとPがそう言ったのを聞いたPに『ふふん♪』と伊織は不敵に小さく笑う。

「まあね…けど、私だっていつかはトップアイドルに上り詰めた暁には自分の力でこの家よりも、もー！ー！っと！大きな家建てちゃうんだから！！にひひッ」

・伊織は765プロ社長・高木順一郎と知り合いである自分の父親のおかげで765プロのアイドル候補生になったが、伊織自身はコネに頼ることはあまり好きではない…それ以来、彼女は水瀬家の力に頼らず、今日まで自分の力でアイドルに磨きをかけ、いつかはトップアイドルの座を目指したいと目標高く志しており、彼女の悪戯っぽい小悪魔的な笑顔がそれを物語っていた。

「立派だなあ…あ、そうだ…お土産持ってきたんだった、社長からのおすそ分け。」

「あら？高木のおじ様が？わざわざ悪いわね。」

「わーい！メロン！メロン！！」

「ZZZ。」

・Pは伊織の高い目標に胸を改めて打たれつつ、高木順一郎氏に代わって社長になった彼の弟・高木順二郎氏から貰ったメロンを土産に持ってきたことからはいやぐ一同…ただ、美希は再びおねむになつてたが…。

「おわっ…！？」

「…あー！？」

・あろうことが、Pは誤ってメロンを床に落としてしまった…『ゴシヤッ』という破砕音と共にメロンが割れ、果汁がダラダラと流れ出てしまった。

「ちよつと…カンベンしてよね…私の部屋なんだから汚されたら敵わないわよ…。」

「あ…メロンもったいない…。」「」

・伊織はおでこに青筋を立てながら静かにキレる…やよい達はメロンが碎けて実に残念そうに落胆した。

「ス、スマン…今、片付け…。」

・Pが伊織達に謝りながら床に落ちたメロンを拾おうとした時…奇妙なことが起きた。

「…アレ？」

「なんと、メロンがPの手をすり抜け、気づけば向こう側の壁の方へと転がって移動していた。」

「いつの間に…？」

「へ？なんでメロンが勝手に…。」

「不思議そうに首を傾げながらメロンを回収するP、伊織も頭に『を旋回させて考えてると…。』

「ねえねえ、もしかしてさ…この家…。」

「傾いてんじゃないの？…なんちて。」

「…ちよつ…ナニ言ってるのよ？この伊織ちゃんの家にはケチつける気…？」

「亜美と真美が何気なく言った一言に伊織は語調こそは穏やかだが内心かなりキレた…自分の家が『傾いてる』などという戯れ言、聞

いてて気分が良いものではないので彼女の怒りも最もである。

「やだなく、いおりん！ジョーダンだって！」

「設計の段階からお父様が綿密な打ち合わせしてたのよ…有り得ないわ…！」

「もういつペンやればハッキリするYO！」

・亜美の指摘はさらに続くが、伊織は家を建てる際の綿密な打ち合わせを直接した自分の父親に誓って傾いてないと否定するも真美がもう一度メロンを転がせなどと言い出したのでますます怒りや不満を顕著に表わしはじめた。

「だ・か・らあ…家を汚すなって言ってるでしょ？ハハツ…なんか、無性に腹が立ってきたわ…来たばかりで悪いけど…もう帰ってもらえる…？フフツツ…。」

「え…？」

・どこことなく追い詰められた様な…顔を引き攣らせた不自然な笑みを浮かべつつ、伊織は身体を打ち震わせながら心の不安定さや余裕の無ささえも感じる焦りと苛立ち混じりにP達を追い出そうとしたのでPは思わず戸惑った…。

「うつうつ…伊織ちゃん、そんなに怒らないで…ホラ、雨も降ってきたし、もうちょっと…」

「……え…『雨』…？」

・怒りの伊織をなだめるやよい…だが、彼女の発したおかしい『単語』に反応する一同の頭上からポツポツと水の雫が静かに降り注いだので、天井を見上げると…。

（（『雨』…だ…））

（正確には『雨漏り』って奴だが…。）

「むにゃむにゃ…おにぎりがいっぱいな…。」

・なんと、伊織の部屋…いや、水瀬邸全体に雨漏りが降り注ぐという普通ならば決して有り得ない現象が起きていた…だが、そんな状況下でも美希は好物のおにぎりの夢を見ながら平然と眠り続けた。

「ブツブツブツブツ…。」

・上を向いたまま小刻みに震えつつ、何やら変な呟きを漏らす伊織を眺めながらP達は静かにヒソヒソ話をしていた。

「い…伊織ちゃん…。」

「あ…あのさ、いおりん…。」

「これは…ちょっと。」

「オ、オイ…この家、マジでヤバイんじゃないか…？」

「は…！？な、ナニが…？こ、これはそう…タマタマよ！タマタマ！今までこんなことは一度も…。」

・全員（寝てる美希以外）、ガチで伊織の心配をするが、肝心の伊織は下手な言い訳をしていて全く聞き入れず、激しく狼狽しきっていた…恐らく以前にも家に問題が起きたことがあったようだ。

「オイッ…この壁紙、簡単に剥がれるぞ！ホラホラホラホラ…。」

「うつうつー！？」

「うわぁっ！？ナニこれッ！！」

「ちょっと濡れたぐらいで剥がれるなんて…ヒドッ！？」

「ナニしてんのよ！？家を壊すのはヤメなさい！！」

・Pがほんの軽く壁を引っ張ると、なんということだろう…濡れたせいか壁紙がいとも容易くベリベリと剥がれまくったではないか、さらには…。

「うつ！？コ…コイツは…！！」

・壁紙の下の地の壁から蜘蛛の巣の様に縦横無尽に広がってる無数の亀裂が発見された、しかも『ピシッ』という不吉な音を立てて

る…Pはそれを見て顔が真っ青になった。

「あら？イイ模様じゃない！こんな仕掛けがあるなんて、伊織ちゃんビックリしちゃった♪…ウフフ…フフ…♪」

「伊織ちゃん！？しつかりしてー！」

「オイイイイ！？ちよつと大丈夫なの！？主に精神面的な意味でツメンタル
！！」

「現実を見なYO！いおりんツ！！」

・伊織は亀裂を見ながら自分の世界へと現実逃避し、爽やかな笑顔を浮かべては怪しく笑い出したため、やよいと亜美・真美は必死に彼女を揺さぶりながら正気に戻そうとしていた…が、またしても新たな問題が起きた。

「ん…？なんか、ガス臭くないか…？」

「「「「「！？」」「」」」」

「これは…一階^{した}からだアアアア！！急げー！ーッ！！」

・なんと、ガスの臭いがどこからともなく、一階を通じて二階にまで漂ってきたのだ…この非常事態にPとアイドル達は真っ先に動き出した、ちなみに美希は放置された。

「うっうー！？ガ…ガス臭いですうー！！」

「オエツ！？早く窓開けてよー！いおりん！真美！！」

「窓！窓！窓！！ま。か マギカー！！」

「なんでこんなことになってんのよー！！？」

「あつ！？ガス管にヒビがッ！！」

・とある一室…そこはガス管のヒビが原因で部屋中、異常なまでにガスが充満しており、一同はガス特有の刺激臭に苦しみながら窓を全開にして最悪の事態を防いだ…つもりだったが、時既に遅し…。

「…！？」

・伊織が部屋に誰かが倒れてたのを見つけ、化石の様に固まった。

「新堂オオオオオ~~~~！！」

・それは口から泡を吹き出しながら白目を剥いて床に俯せで倒れていた伊織の専属執事・新堂だった…。

・水瀬邸・庭先にて。

「新堂…新堂おお…。」

「…家庭菜園が、『家庭霊園』に…。」

「プロデューサー！！不謹慎です！！」

「新堂さん、普通に生きてるYO！！」

・現在、雨が降りしきる庭先にて運んだ新堂を寝かせており、側で伊織が悲しそうに泣いていた、だがPは自重せずに洒落にならんブラックギャグをかました…当然即座に亜美・真美からツツコミを入れられる…だが幸いにも発見が早かった、新堂はガス中毒で失神してるだけで無事だった、後は救急車にでも任せれば良いだろう。

「プロデューサー…伊織ちゃんのお家って…。」

「ああ…そうだ、やよい…もう間違い無いだろう…この家は…。」

・二人は伊織に対して残酷な死刑判決に等しい現実という名の真実を突きつけた…その名は…。

「『欠陥住宅』…だよ。」

- 『欠陥住宅』、そう…それが最早、言い訳不可能である水瀬家の真実の姿であつた…。

「死んじまつた新堂さんのためにも徹底的に調べあげるぞー!!」

「まだ生きとるわアアアア!!」

- そんなこんなで欠陥住宅であることを証明するため、より詳しい調査を行うことになったP達、またまた新堂を勝手に殺して伊織にツッコミ入れられたが気にしてはならない、彼らはまずは床板を外して床下から調べてみることにした。

- 床下。

「ウオッ!? 汚ったねえな〜!!」

「…。」

「うつうつ？大工さんの食べ残しですかね？」

「うわ！お酒臭ッ！？」

「ほほ？えっちい本までありますな。」

・床下に関してはずさんなもので、持ち帰らずにその辺に捨てたま
まになってる建設業者の空のコンビ二弁当や酒の缶やビンなどのゴ
ミ類や全裸で股をおっ広げてるグラビアアイドルの写真が載って
るページが全開のエロ本が散らばっており、それを見たP・伊織・や
よい・亜美・真美達はすっかり呆れかえっていた。

「フフ…まあ、これぐらいなら片付ければ何の問題…。」

「オッ…オイッ…！見ろよ！この『柱』ッ…！」

「…もッ…！？」

・散乱したゴミを見て、伊織は脂汗を垂らし、激しく動揺しながら
もあくまで冷静を保ちながら何ら問題無く振る舞うが、Pが発見し
た柱を見て絶句した…。

「柱…いや、柱というよりも棒ッキレだぞ！こりゃあッ！？」

「『…』『細オッ！？』『…』『…』」

「なんと、家を支えてるハズの柱が異様なまでに細かったのだ。」

「しかもソレが二本しかないですよ!？」

「「た… たったコレダケでこの家は支えられていたのーッ!？」」

「やよい達が指摘した様に、二本のか細い柱だけで大豪邸である水瀬家を支えるなど到底正気の沙汰ではない… 例えるならば、割り箸二本でキング・ザ・100トンを支えるくらいの無茶ぶりである。」

「伊織… お前の父親は設計の段階での綿密な打ち合わせでナニしてたんだ…?」

「…。」

「Pのツツコミに伊織は身体をうち震わせ、顔を絶望的な青に染めるしか出来なかった…。」

「いやいやいやいや… コレは… そう! ものスゴク丈夫な新素材なんじゃないかしら!？」

「ンなワケあるかああああああ!？よく見ろオオオオオオオオ
!?!」

「苦し紛れに未だに望みを見出だそうとしてる伊織だったがPはそ

れにトドメを刺した。

「い…いやあああああああ…！！ナ、ナニよコレエエエエエエー！？」

・なんと…二本の柱の一面にシロアリがビッシリ、ワサワサと沸いており、柱をセッセと喰らい、ボロボロにしていたのだ…その無惨極まりない光景に伊織以外、全員眼を反らした…。

「ナニをやッてるのよ！この虫ケラッ…！！私の家を食べるなアアアアアア！！ヤメなさいよオオオオオオオオ！！」

・伊織は必死に手でシロアリ達を払い除けるが全てはもう…既に遅かった。

「伊織！コレが現実だッ！見るんだー！！オマエの父親はこんな家を大枚はたいて建てちまっただよー！！」

「ヤメテエエエエエエー！！」

・Pがボロボロの割り箸柱を掴んで乱暴に揺ると水瀬家全体がまるでコンニャクがダンスを踊ってるみたいにグニャグニャと揺れまくる…伊織は頭を押さえながら泣き叫び出した。

「現実なんて見せないでエエエエエエー！！せめて十年…いや、あと一年でいいから現実は見せないでエエエエエエー！！」

「ダメだッ！！見るッ！見るんだーッ！！」

（（（き、鬼畜だアアアアアアー！！）））

・見たくもない現実という名の真実を見て嘆く伊織に対して柱を揺すりながら容赦なく畳みかけるPの姿に三人のアイドル達には実に鬼畜にしか映らなかった、そんな時だった…。

・…バキッ。

「『…あッ。』」

・Pが揺すつてた柱が見事にヘシ折れてしまった…。

「崩れるぞオオオオオオオオ！？逃げろオオオオオオオオ！！」

「……キヤアアアアアアアアアアア！？」」

・最悪の事態にPとアイドル達は床下から急いで這い出て、ついでに2階に放置してきた美希を超特急で回収し、軽く音の壁を越えたスピードで一同は崩壊を始めた水瀬家から脱出した…。

・そして全員が無事脱出したと同時に水瀬家はドリフのコントに使われるセットばりに呆気なく全壊し、後に残ったのは瓦礫の山だった…。

「むにゃむにゃ…金色イクラとストライプサーモンのおにぎり…ふぁぁぁ…アレ？でこちゃんのお家が消えてる…？」

・尚、グルメ食材が出てきた夢を見てた美希がここでようやく目が覚めたという…。

「…。」

「まっ…ほら、命があっただけ儲けモンさ…な？伊お…。」

・Pがワナワナと震えてる伊織を慰めようと話かけようとしたが…。

「フフ…わ…の家……………私…の家…ウフフ…。」

・…虚ろな眼で瓦礫の山を見ながら、淡々と小声で独り言を呟いていた…。

「あ…じゃ、じゃあオレ達帰るわ…！！」

「ま…また呼んでね、伊織ちゃん！」

「っ、次のおうち建てるまで待つてるから！！」

「あふう…頑張つてなの…。」

・ 気まずい雰囲気くつきと絶望のドン底にいる伊織の見るに堪えない姿にPは耐え切れず、やよい達を車に乗せて帰ってしまった…今は伊織一人にさせるべきだとそう判断したからだ。

「…ふうう、ううつ…うえ…ふえええええ…。」

・ 気づけばもう雨はすっかり止んでおり、夕陽が昇り始めていた…伊織はフラフラと後で皆に案内する予定の大浴場…だった場所の位置へ歩き出し、お湯の張っていない浴槽に浸かりながら、空高くに赤く輝く夕陽を見ながら声を押し殺し、素でガチ泣きしたという…。

・ その後、今度はちゃんとした業者と建設会社によって水瀬家は元通りになった…尚、以前の欠陥住宅を建てた悪質業者達は水瀬家が総力上げて捕縛、ついでに柱を揺すって家を倒壊させたPも拉致…ミンチにして東京湾の魚のエサにしてやったという…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5204v/>

お宅訪問の765プロ

2011年10月9日20時56分発行